

総合人文科学研究センター研究部門
現代社会における「想像力」の総合的研究

2019 年度第 3 回研究会の報告

日時：2020 年 1 月 24 日（金）18 時 30 分から 20 時 30 分
会場：戸山キャンパス 33 号館 6 階、第 11 会議室

第 3 回研究会は、「多和田葉子『献灯使』をめぐる想像力」をテーマとして開催された。まず、松永美穂氏（本学教授）から「多和田葉子『献灯使』が描く人々」と題した導入報告があり、続いて、マーガレット満谷氏（共立女子大学名誉教授）から「『献灯使』と近未来の世界」と題した提題が行われた。その後、質疑が行われたが、今回の研究会にも学内外から多くの研究者が参加され、20 名ほどの参会者によって活発な意見交換が行われた。（御子柴善之記）

2014 年出版の多和田葉子の『献灯使』について、松永美穂とマーガレット満谷が発表を行った。松永は多和田のこれまでの作品をいくつかのグループに分類した上で、『献灯使』に収められた 5 つの作品がいずれも福島原発事故後の状況を受けて書かれた、近未来を舞台にした作品であることを説明し、東日本大震災が多和田にとって一つの転換点となったことを指摘した。これらの作品には多和田らしい文字遊びや言葉遊びの要素もちりばめられており、悲劇的な状況を描いてはもどかか戯画的で、悲惨さは強調されない。しかし、繰り返されるイメージとしては日本が汚染されて広い範囲にわたって居住不可能となり、他国との通信を絶たれるということで（「動物たちのバベル」では人類全体が滅亡している）、経済復興によって社会が旧に復するという見通しはなく、むしろ身体の変質によって競争社会もなくなり、ある意味穏やかなスローライフが実現している。

マーガレット満谷は「献灯使」をジョージ・オーウェルの『1984』と比較し、それぞれの作品に描かれた言語の統制、鎖国状況、監視社会などの共通点と相違点を分析した。どちらの作品でも伝統的な家族制が崩壊しているが、多和田の作品にはオーウェルの作品にはない「いたわり」の気持ちが滲み出ており、本来の家族を離れて「他家の子学園」のような、血のつながらない子どもたちの世話をするエピソードも見られ、「人間は人間にしか頼れない」という主張が読み取れると結論づけた。

参加者からは、多和田の「フラジャイルな想像力」や「マイナー文学的なずらし」についての指摘があり、さらに作品の受けとめられ方や作者の執筆意図について、活発な質問が出された。（松永美穂先生記）